

平成18年度第3回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し独立行政法人水産総合研究センター
中央水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(2007年4月～7月)

海況

潮岬以東の黒潮は、期間を通して規模の大きな蛇行が継続し、4～5月はC型流路、6～7月はB型流路となる。

沿岸水温は、潮岬以西が「平年並み」～「高め」、潮岬～犬吠埼が「平年並み」～「やや高め」で暖水波及時に「高め」～「かなり高め」、伊豆諸島南部海域が「高め」～「低め」で短期的に変動し、犬吠埼以北が「平年並み」～「高め」で親潮系冷水南下時に「極めて低め」で推移する。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、やや高め＝平年値+1.0℃程度、
高め＝平年値+1.5℃程度、かなり高め＝平年値+2.0℃程度、
低め＝平年値-1.5℃程度、極めて低め＝平年値-2.5℃程度

漁況(来遊量予測)

マサバ・ゴマサバ太平洋系群

1、2歳魚は前年を下回る。

3歳魚は前年を上回る。

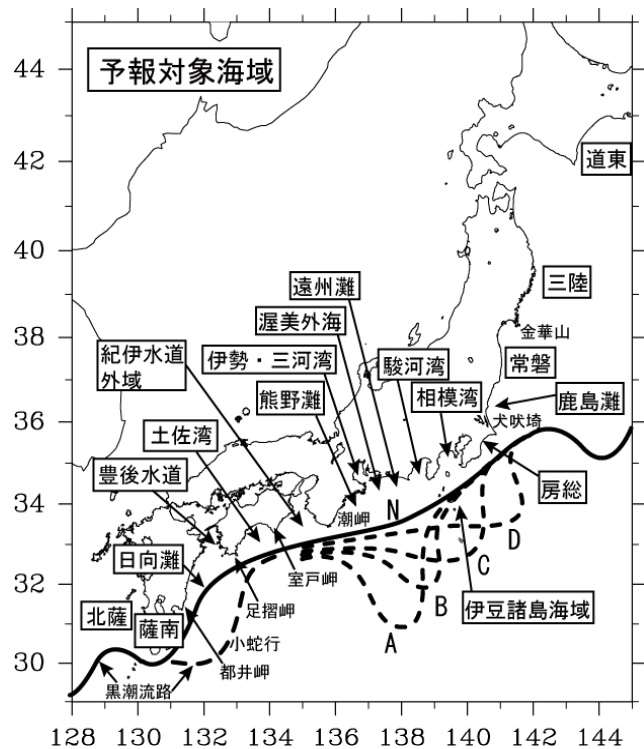
サバ類全体としては前年を下回る。

マイワシ太平洋系群

低水準が引き続く。

カタクチイワシ太平洋系群

全体としては前年を下回る。



問い合わせ先

水産庁 増殖推進部 漁場資源課 沿岸資源班 担当：青木、田中、佐藤

〒100-8950 東京都千代田区霞が関1-2-1

電話：03-3502-8111(内線7375)、直通電話：03-3501-5098、ファックス：03-3592-0759

電子メール：yuusuke_satoh@nm.maff.go.jp

独立行政法人水産総合研究センター 中央水産研究所 業務推進部

〒236-8648 横浜市金沢区福浦2-12-4

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001、電子メール：nrifs-kiren@ml.affrc.go.jp

本予報は水産庁のホームページ(<http://www.jfa.maff.go.jp/release/index.html>)、水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査推進委託事業のホームページ(<http://abchan.job.affrc.go.jp/>)、及び中央水産研究所のホームページ(<http://www.nrifs.affrc.go.jp/>)に掲載されます。

参 画 機 関

北海道立釧路水産試験場	三重県科学技術振興センター 水産研究部
青森県水産総合研究センター	和歌山県農林水産総合技術センター 水産試験場
岩手県水産技術センター	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究所
宮城県水産研究開発センター	高知県水産試験場
福島県水産試験場	愛媛県中予水産試験場
茨城県水産試験場	愛媛県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	大分県農林水産研究センター 水産試験場
東京都島しょ農林水産総合センター	宮崎県水産試験場
東京都島しょ農林水産総合センター 大島事業所 八丈事業所	鹿児島県水産技術開発センター
神奈川県水産技術センター	社団法人 漁業情報サービスセンター
神奈川県水産技術センター 相模湾試験場	水産庁 増殖推進部 漁場資源課
静岡県水産試験場	独立行政法人 水産総合研究センター 東北区水産研究所 中央水産研究所
静岡県水産試験場 伊豆分場	
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2007年4月～7月）

（1）黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと。）

◎潮岬以西

- ・薩南海域の黒潮北縁は、4月と7月は屋久島南付近での変動が多く、5月に接岸傾向、6月に離岸傾向となる。
- ・黒潮は、期間を通して都井岬沖～足摺岬沖で接岸傾向、室戸岬沖～潮岬沖で離岸傾向で推移する。

◎潮岬以東

- ・黒潮は、期間を通して規模の大きな蛇行が継続し、4～5月はC型流路、6～7月はB型流路となる。
- ・房総沖の黒潮は、期間を通して接岸傾向となる。

（2）薩南～房総沿岸域

- ・潮岬以西では、冷水渦の東進に伴って、その渦の東側で沿岸域へ一時的に暖水が波及する。
- ・潮岬以東では、B型流路のとき、熊野灘～遠州灘は内側反流による暖水の影響を受けやすく、一時的に強い暖水流入も考えられる。C型流路のときも、冷水域の中心は伊豆海嶺の西側に位置し、伊豆諸島南部海域は蛇行北上部の変動に伴って断続的に昇温と降温を繰り返す。

（3）鹿島灘～常磐南部海域

- ・房総沖の黒潮の離接岸変動に伴って黒潮系暖水が沖合から沿岸域へ波及することがある。

（4）沿岸水温

- ・潮岬以西は「平年並み」～「高め」で推移する。
- ・潮岬～犬吠埼は「平年並み」～「やや高め」で暖水波及時に「高め」～「かなり高め」で推移する。
- ・伊豆諸島南部海域は「高め」～「低め」で短期的に変動する。
- ・犬吠埼以北は「平年並み」～「高め」で親潮系冷水南下時に「極めて低め」で推移する。

※ 平年並み＝平年値±0.5℃程度、やや高め＝平年値+1.0℃程度、高め＝平年値+1.5℃程度、
かなり高め＝平年値+2.0℃程度、低め＝平年値-1.5℃程度、極めて低め＝平年値-2.5℃程度

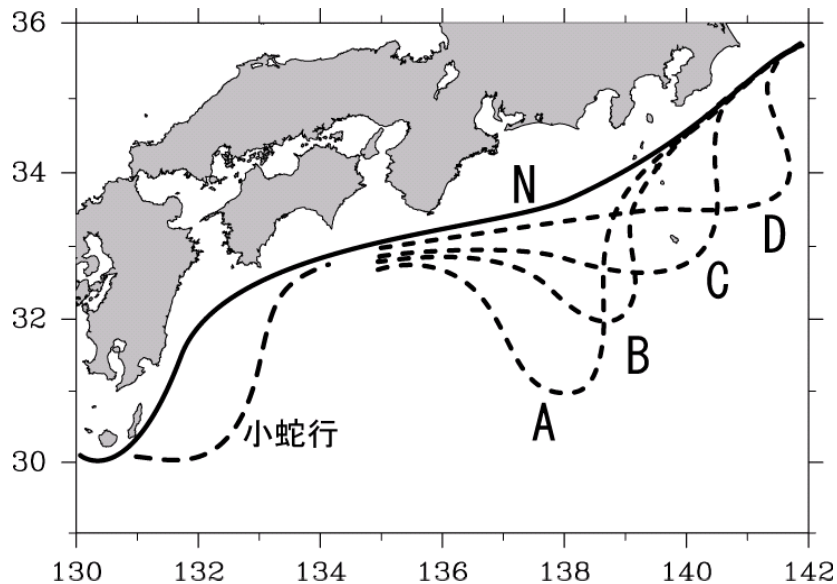


図1 黒潮流型の分類

経過（2007年1月～3月）（注：経過は図2を参照のこと。）

（1）黒潮

- ・ 1月前半まで潮岬に接岸して遠州灘を東へ直進するN型流路で推移した。
- ・ 1月後半、小蛇行の東端が熊野灘に流入し、W字状の流路となり、典型的なN型流路は解消した。
- ・ 2月上旬、W字状の流路が東へ移動し、D型流路となった。
- ・ 2月中旬、小蛇行本体が潮岬沖を通過し、2月下旬にB型流路へ移行した。
- ・ 3月上旬、蛇行北上部がS字状となり、典型的なB型流路となった。

（2）薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・ 1月、黒潮北縁は接岸傾向で推移した。特に、1月中旬～下旬の約2週間、接岸傾向が継続した。
- ・ 2月、黒潮北縁は屋久島南付近の平均的な位置であった。
- ・ 3月上旬、黒潮北縁は接岸傾向で推移した。

◎潮岬以西

- ・ 1月～2月、前年11月九州南東沖に形成された小蛇行が分裂しながら四国沖を東進した。
- ・ 2月以降、都井岬沖の黒潮は「やや離岸」で推移した。
- ・ 3月上旬、都井岬沖～足摺岬沖で「接岸」、室戸岬沖～潮岬沖で「やや離岸」となった。

◎潮岬以東

- ・ 1月上旬～中旬、伊豆諸島北部海域を中心に駿河湾～相模灘へ暖水が波及した。
- ・ 1月後半以降、熊野灘～遠州灘は黒潮系暖水の波及が継続した。
- ・ 1月後半、黒潮の流型変化に伴って、外房海域に暖水波及が見られた。
- ・ 1月下旬、伊豆諸島北部海域は冷水域に入った。
- ・ 2月、外房沖を冷水域が東へ移動した。
- ・ 3月上旬、蛇行北上部がS字状となり、遠州灘から熊野灘にかけて内側反流が強まった。また、蛇行北上部が伊豆半島に著しく接岸し、駿河湾から相模湾にかけて暖水が強く波及した。
- ・ 3月上旬、九十九里沖～犬吠埼沖の黒潮は離岸した流路パターンとなった。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 1月、ごく沿岸域に南下流が卓越し、下旬には暖水舌が形成された。
- ・ 2月、黒潮の蛇行は房総沖を東進し、下旬に沿岸域へ強く暖水を波及させた。ごく沿岸域は南下流により北方の混合水が流入し、その沖の暖水舌や暖水塊から沿岸域に暖水が波及した。
- ・ 3月上旬、暖水塊の接岸に伴って黒潮系暖水の波及が非常に強まった。

現 況 (2007年3月18日現在)

(1) 黒 潮

- ・ 黒潮は規模の大きいB型流路で推移している。

(2) 薩南～房総沿岸域

◎薩南海域

- ・ 黒潮北縁は屋久島付近の平均的な位置にある。

◎潮岬以西

- ・ 黒潮は都井岬沖～室戸岬沖で「接岸」、潮岬沖で「やや離岸」している。
- ・ 土佐湾および紀伊水道外域に暖水波及が見られる。

◎潮岬以東

- ・ 黒潮は熊野灘沖～遠州灘沖を離岸傾向で流れ、石廊崎沖で 32° N以南まで南下した後、伊豆海嶺上を北上し、三宅島付近を通過して東へ流れている。
- ・ 熊野灘～遠州灘の内側逆流と駿河湾、相模灘への暖水波及は弱まりつつある。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 暖水塊の接岸に伴って沖合から黒潮系暖水が波及している。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に従った。

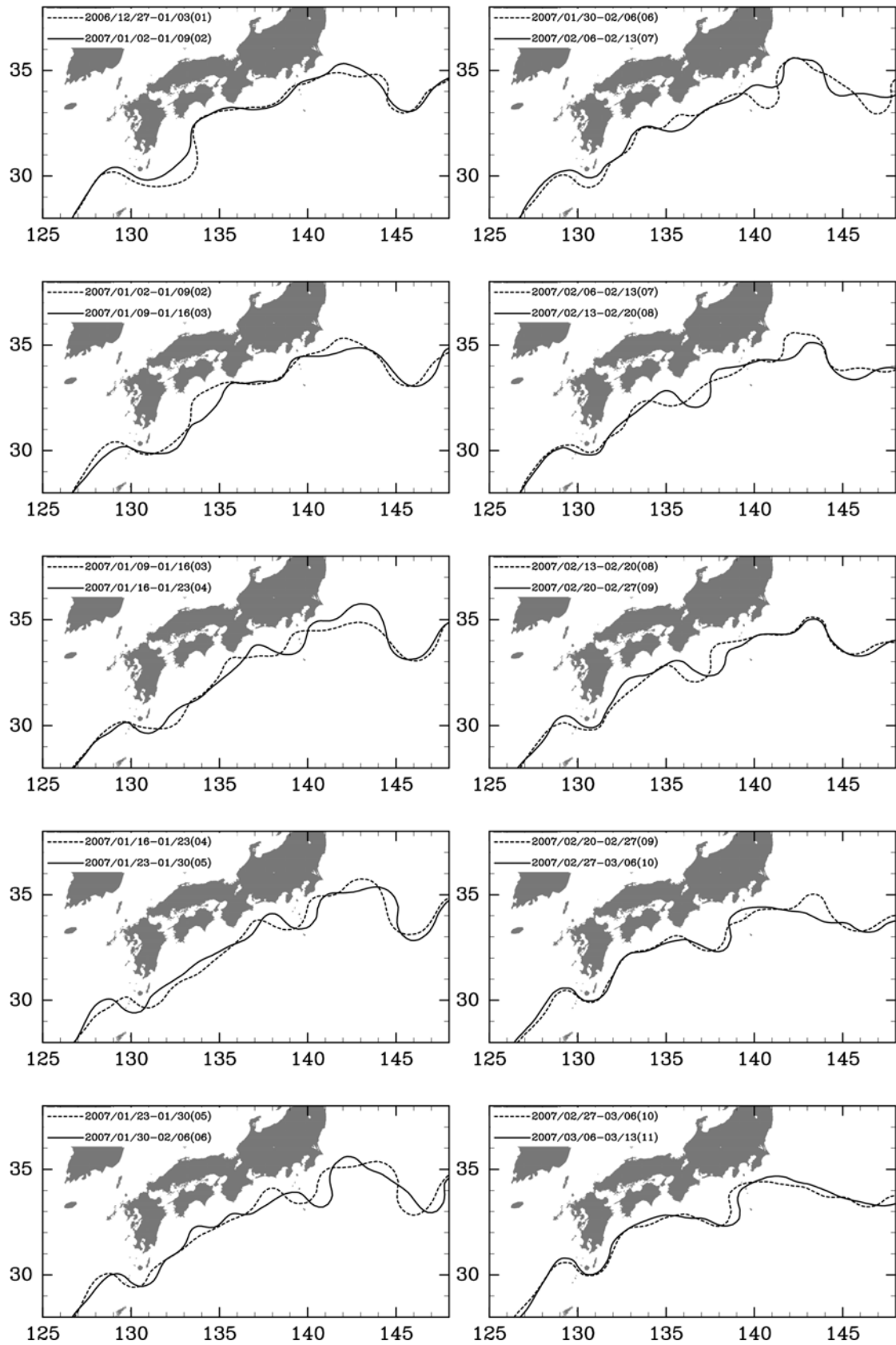


図1 黒潮流軸のパターン
 (2007年1月～3月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マサバおよびゴマサバ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し（2007（平成19）年4月～7月）

対象海域：薩南～豊後水道、紀伊水道外域、熊野灘、伊豆諸島周辺海域、犬吠～常磐海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受け網、たもすくい

対象魚群：1歳魚（2006（平成18）年級群）、2歳魚（2005（平成17）年級群）、3歳魚（2004（平成16）年級群）、4歳（2003（平成15）年級群）以上。魚体の大きさは尾叉長で表示。年初に加齢。

1. 薩南～豊後水道（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバは低水準だが、薩南では1歳魚は前年を上回る。ゴマサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は好調であった前年を大きく下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳以上は少ない。サバ類全体としては、薩南では前年並みで平年を上回り、日向灘～豊後水道では前年を下回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、29～37 cm（1～3歳魚）が漁獲される。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1、2歳魚は前年を下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳以上は少ない。サバ類全体として前年を下回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、30～36 cm（2、3歳魚）が主体で、30 cm以下（1歳魚）が混じる。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚は少ない。2歳魚は好調であった前年を大きく下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳以上は少ない。サバ類全体として前年を下回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：ゴマサバが主な漁獲対象となり、30～36 cm（2、3歳魚）が主体で、30 cm以下（1歳魚）が混じる。マサバは混獲程度。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受け網、たもすくい）

- (1) 来遊量：マサバ3歳魚は前年を上回る。ゴマサバ1歳魚は少ない。2歳魚は前年を大きく下回る。3歳魚は前年を上回る。4歳以上は少ない。サバ類全体としては前年並か、やや下回る。
- (2) 漁期・漁場：マサバの漁場は伊豆諸島北部海域が中心となる。ゴマサバは期を通じて三宅島周辺が主漁場となり、伊豆諸島北部海域ではマサバに混獲される。
- (3) 魚体：マサバは32～36 cm（3歳魚）主体、29～32 cm（2歳魚）が混じる。ゴマサバは29～33 cm（3歳魚）が主体となる。

5. 犬吠～常磐海域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバ3歳魚は前年を上回る。マサバ1歳魚は前年を下回る。マサバ2歳魚は前年を大きく下回る。マサバとしては前年を下回る。ゴマサバは前年を下回る。サバ類全体として前年を下回る。
- (2) 漁期・漁場：まき網漁場は犬吠～常磐南部海域が主体となる。
- (3) 魚体：マサバは31～35 cm（3歳魚）主体に28～30 cm（2歳魚）が混じる。ゴマサバは28～34 cm（2、3歳魚）が混獲程度。

漁況の経過（2007（平成19）年1月～3月）および今後の見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マサバ：近年の産卵親魚量は低水準ながら増加傾向にある。

2003年級群（4歳魚）以上の残存資源量は少ない。

2004年級群（3歳魚）は、2006年7月時点では加入尾数24億尾と1992年級群に準ずる加入水準と考えられたが、2007年3月の現在まで漁獲の主体をなし、2006年秋季には2歳魚としては近年にない豊漁となった。このことを踏まえ、現時点で得られる最新の情報を用いて資源量を再評価すると、2004年級群の加入尾数は35億尾と1992年級群を上回る水準と考えられる。

2005年級群（2歳魚）は、再評価結果では加入尾数4億尾程度と評価され、2001・2003年級群並の低水準と考えられる。茨城水試による未成魚越冬群指数や調査船調査による資源量の指標はいずれも低く、漁業における漁獲状況も良くないことから加入水準は低いと考えられる。

2006年級群（1歳魚）は、現在までの漁業による漁獲状況は極めて低調であり、ほとんど漁獲されていない。2006年5月の黒潮統流域幼魚調査、2006年6～7月の黒潮一親潮移行域の中層トロール資源調査（東北水研）、2006年6～10月の三陸～道東海域の流し網調査（釧路水試）、2006年9～10月の常磐～三陸～道東～千島沖合海域の中層トロール調査（東北水研）のいずれの調査においても漁獲量が著しく少なかったこと、2007年2月に行われた開洋丸・俊鷹丸による未成魚越冬海域（常磐～房総海域）における調査（中央水研）でもほとんど分布が認められなかったことから、加入量水準は2005年級群を下回る可能性が高い。

(2) ゴマサバ

コホート解析による資源量計算に基づく各年級群の推定加入尾数は、2002年級群は10億尾、2003年級群は6億尾であり、2004、2005年級群は若齢であるためコホート解析の特性上不確実性が高いが、それぞれ18億尾、6億尾であった。

2003年級群（4歳魚）以上の残存資源量は少ない。

2004年級群（3歳魚）は近年の卓越年級群である1996年級群（推定加入尾数：17億尾）と同程度の加入尾数であったと推定され、前期に引き続き各地漁業の漁獲主体であったことから卓越年級群であると判断される。越冬期未成魚を主対象とした2月の常磐～房総沿岸から155°Eまでの黒潮統流域の中層トロール調査（中央水研）においても常磐沿岸の1調査点で多獲がみられた。

2005年級群（2歳魚）は、静岡県水試の棒受網漁業CPUEに基づく加入量指数は1995年以降最低であり、鹿児島県を除く各地漁業での漁獲も少なかった。推定加入尾数は少なく、これまでの漁況経過や調査船調査結果からも豊度は低いと判断される。

2006年級群（1歳魚）は、2月までの各地漁業の漁獲状況では、鹿児島県のまき網では比較的多く漁獲されているがその他の海域では例年に比べて少ないか漁獲されていない。12月までの釧路水試、東北水研、および中央水研の調査船漁獲調査では、0歳魚として2004、2005年級群を下回るCPUEや出現率であった。前述の2月の越冬期中層トロール調査では、2006年級群と判断される25cm以下の個体は計52点の漁獲試験において143°E以西の沿岸寄りの3点だけで約150尾が漁獲され、分布量は少なかった。以上から、2006年級群の加入量水準は低いと判断され、2005年級群を下回る可能性が高い。

2. マサバ

(1) 来遊量

4歳以上（2003年級群以上）の残存資源量は少なく来遊量は少ない。

3歳魚（2004年級群）の残存資源量は前年同期の3歳魚（2003年級群）を上回ると考えられることから

来遊量は前年を上回る。期前半は産卵のため房総以南にとどまるが、期後半には産卵後北上群としてまき網漁業でも漁獲される。

2歳魚(2005年級群)の残存資源量は前年の2歳魚(2004年級群)を大きく下回ると考えられることから、予測期間における犬吠～常磐海域への来遊量は前年同期を下回る。

1歳魚(2006年級群)の加入量は、前年1歳魚(2005年級群)を下回ると考えられることから、犬吠～常磐海域への来遊量は前年を下回ると考えられる。

以上のことから、犬吠～常磐海域では、3歳魚(2004年級群)が主体となり、これに2歳魚(2005年級群)が混じる。1歳魚(2006年級群)および4歳魚以上は少ない。全体の来遊量は好調であった前年を下回ると考えられる。伊豆諸島周辺海域では、豊度の高い3歳魚(2004年級群)が産卵海域にとどまることから来遊量は前年を上回る。伊豆諸島より西部の海域ではサバ類に占める近年のマサバの割合は低く、漁場形成があっても不安定である。

(2) 漁期・漁場

伊豆諸島より西部の海域では、マサバは低調に推移しており、今期も期待できない。ただし薩南海域では1歳魚の来遊が好調に推移しており、前年を上回ると考えられる。

伊豆諸島海域では2007年1月からマサバ主体の漁場形成が継続している。伊豆諸島北部海域を含む潮岬～犬吠崎の沿岸水温は平年並み～やや高めで推移すると予測されていることから、今後も伊豆諸島海域北部海域で漁場が形成されると考えられる。

常磐～三陸海域におけるまき網漁場は、12月は常磐中部～鹿島沿岸(漁獲量35,069トン(前年同期32,228トン)、1月は犬吠崎沖～鹿島沿岸(漁獲量19,013トン(前年同期30,764トン))、2月は常磐南部～鹿島沿岸(7,882トン(同9,579トン))で形成され、2月下旬～3月は犬吠崎沖周辺で漁場が形成された。今期は犬吠崎周辺が主漁場となり、期後半には常磐南部海域にも漁場が形成されると考えられる。

(3) 魚体

1～2月の犬吠～常磐海域のまき網漁業における1歳魚(2006年級群)の体長は27cm以下、2歳魚(2005年級群)は28～30cm、3歳魚(2004年級群)は31～35cm、伊豆諸島海域のたもすくい漁業における2歳魚の体長は29～32cm、3歳魚は32～36cmであり、今期も同様の体長組成となると考えられる。

(4) 資源管理

マサバの産卵親魚量は低い水準ながら増加傾向にある。2004年級群は、近年の卓越年級群である1992年級群を上回り、1996年級群に次ぐ豊度の高い年級群と考えられる。今期は3歳として産卵群の主体をなしており、産卵量の増加が期待される。しかし続く2005・2006年級群の加入量水準は低いと考えられることから、産卵親魚量の増加傾向は一時的なものに留まる可能性がある。現在マサバ太平洋系群の産卵親魚量の回復を目指した資源回復計画が実行されている。今後も産卵親魚量の増加傾向を維持しマサバ資源の回復を図るためには、引き続き若齢魚を保護する必要がある。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述の通り、1歳魚(2006年級群)は加入量水準が低く来遊量は少ない。2歳魚(2005年級群)は資源量水準が低いと推定され、2007年2月までの漁況では、例年漁獲の主体となる熊野灘以西海域においても薩南～北薩を除き漁獲は少なかった。来遊量は、加入豊度の高い前年の2歳魚(2004年級群)と比べることから前年を大きく下回る。3歳魚(2004年級群)は、依然として各地漁業の漁獲主体となっており、残存資源量は3歳魚としては高い水準にあると推定され、来遊量は前年を上回る。4歳(2003年級群)以上の残存資源量は少なく、来遊量は少ない。東シナ海から来遊資源のある薩南海域では、1、2歳魚の来遊量は前年を下回るものの平年を上回り、ゴマサバ全体では前年並みで平年を上回る。他の海域

では、2004年級群に続く年級群の加入豊度は低く、全体では前年を下回る。

(2) 漁期・漁場

2006年12月～2007年2月の各海域のゴマサバ漁況は、熊野灘以西では、紀伊水道外域～熊野灘、および薩南海域では前年を上回り、他の海域では好調であった前年を下回った。12～2月の漁獲量は、薩南海域～紀伊水道外域は10.3千トン（前年同期実績8.4千トン）、熊野灘は3.9千トン（同1.3千トン）であった。

伊豆諸島周辺海域では、たもすくいは北部海域でのマサバ主体の漁獲が多かった。棒受け網、まき網も合わせた12～2月の漁獲量は9.8千トン（前年同期実績7.3千トン）であり、前年を上回った。

犬吠以北海域のまき網では、常磐北部以南の海域でおもに3歳魚がマサバに混じって漁獲された。12～2月の漁獲量は12.0千トン（前年同期実績5.5千トン）であり、前年を上回った。

熊野灘～日向灘では、3歳魚（2004年級群）の資源水準が高いものの、主体となる1歳魚（2006年級群）、2歳魚（2005年級群）が少ないため、期を通じて漁場が形成されるが低調となる。薩南海域では、期を通じて漁場が形成され好調に推移する。

伊豆諸島周辺海域では、主体となる3歳魚（2004年級群）の来遊量が多く、近年の主漁場である三宅島周辺海域で期を通じて漁場が形成される。北部海域ではマサバに混獲される程度。

犬吠～常磐海域では、主体となる1、2歳魚（2006、2005年級群）の来遊量が少なく、3歳魚（2004年級群）は予測期間終盤に北上群が漁獲されるが多くはなく、例年の漁況経過からみてもゴマサバ主体の漁場形成はない。

(3) 魚体

体長組成の推移、年齢査定の結果から、今期の年齢別尾叉長は概ね次の通りである。1歳魚（2006年級群）：30 cm 以下、2歳魚（2005年級群）：30～33 cm、3歳魚（2004年級群）：30～37 cm、4歳以上（2003年級群以上）：36 cm 以上。伊豆諸島周辺以北海域では、若齢魚の体長はこれよりやや小さい。

熊野灘以西海域は、例年1歳魚が漁獲の主体になるが、今期は、1、2歳魚の来遊量は少ないとみられることから、資源水準の高い3歳魚の漁獲物に占める割合が高い。伊豆諸島周辺海域では資源水準の高い3歳魚が漁獲の主体になる。犬吠以北海域では、2～3歳魚がマサバに混獲される。

マイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し(2007(平成19)年4月～7月)

対象海域:北薩～道東

対象漁業:まき網、定置網、船曳網

対象魚群:0歳魚(2007(平成19)年級群)、1歳魚(2006(平成18)年級群)、2歳魚(2005(平成17)年級群)並びに3歳魚(2004(平成16)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 日向灘～駿河湾のマシラス(船曳網)

(1) 来遊量:全体として低水準であるが、渥美外海では前年を上回る。

(2) 漁期:渥美外海は3～5月、遠州灘～駿河湾では6月まで。

2. 北薩～熊野灘(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量:低水準の前年並みであるが、日向灘～土佐湾では前年を上回る。

(2) 漁期・漁場:全期間散発的な漁で終始する。

(3) 魚体:17～22cm(1歳魚主体で2歳魚が混じる)に13cm以下(0歳魚)が加わる。

3. 伊勢・三河湾～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量:低水準の前年並みであるが伊勢・三河湾では前年を上回る。

(2) 漁期・漁場:全期間散発的な漁で終始する。伊勢・三河湾では6月以降。

(3) 魚体:15～22cm(1歳魚主体で2歳魚が混じる)に13cm以下(0歳魚)が加わる。

4. 房総～道東(まき網、定置網)

(1) 来遊量:1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳魚は少ない。全体としては前年を下回る。

(2) 漁期・漁場:4～5月は鹿島灘～犬吠埼沖で、6月以降常磐海域に拡がる。常磐北部での漁場形成は6月以降。三陸南部～仙台湾の定置網は5月、三陸北部の定置網は6月から。道東での漁場形成は無い。

(3) 魚体:4～5月は19～21cm(2歳魚)と14～15cm(1歳魚)、6月以降15～17cm(1歳魚)となる。

漁況の経過（2006（平成18）年12月以降）および今後の見通しについての説明

1. 資源状態：

マイワシ太平洋系群の資源量は1994（平成6）年に100万トンを下回り、その後1999（平成11）年までは70万～90万トン台で推移したが、その後再び減少傾向となった。2003（平成15）年以降は10万トン台の低水準にあると推定された。また、依然として減少傾向にあると見られる。

2004（平成16）年級群は、2005（平成17）年の間に実施された沖合分布調査で1歳魚としての採集がほとんど見られなかったことから、分布量は極めて少ないと考えられた。2006（平成18）年の間の漁獲尾数も少なかったことから、2007（平成19）年の3歳魚としての資源量水準は漁獲対象にならないほど低いと考えられる。

2005（平成17）年級群は、2006（平成18）年2月の俊鷹丸による越冬期末成魚調査（中央水研・東北水研八戸）、6～7月の北鳳丸・青海丸による表中層トロール調査（東北水研八戸）で、1歳魚として2004（平成16）年級群を上回る分布密度が見られた。2006（平成18）年6～8月においては、房総～鹿島灘海域での活発な漁獲の主体となり、漁獲量は前年を大きく上回った。8～9月の北辰丸による表層流網調査（釧路水試）でのCPUEも8.7尾/回と近年2年を上回ったが、9～10月の北鳳丸による表中層トロール調査（東北水研八戸）では、前年の皆無を上回ったものの、高い分布密度は認められなかった。これらのことから、2004（平成16）年級群よりはかなり多い加入量があったと考えられるが、沖合域の分布密度は低く、一方で1歳魚として活発な漁獲の対象となった影響で、現在の残存資源量は少なくなっていると考えられる。しかしながら、2007（平成19）年2月の開洋丸による現存量調査（中央水研）では少ないながら採集されており、また漁獲物にも出現が見られることから、今後も漁獲対象になると考えられる。

2006（平成18）年級群は、2006（平成18）年5月の北鳳丸による幼稚魚調査（中央水研）での加入量指数が2.5であり、2001～2004（平成13～16）年は上回ったものの、前年（28）を下回った。2006（平成18）年6～7月に行われた北鳳丸・青海丸による表中層トロール調査（東北水研八戸）並びに北辰丸による表層流網調査（釧路水試）では、沖合域での分布は認められなかった。その後、9月並びに10～11月に行われた北辰丸による表層流網調査（釧路水試）では分布が見られ、近年2年の皆無より上回ったが、9～10月の北鳳丸による表中層トロール調査（東北水研八戸）での分布密度は前年を大きく下回った。2007（平成19）年2月の俊鷹丸並びに開洋丸による現存量調査（中央水研）での分布密度も前年を大きく下回った。これらのことから、2007（平成19）年の1歳魚としての資源量水準は、2005（平成17）年級群を下回ると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体：

マシラス：

マシラスの漁況は近年低水準で推移している。渥美外海では3月に漁獲があり、これは1990年以来のことであった。

未成魚・成魚：

2006（平成18）年12月以降の漁況経過では、2006（平成18）年級群と2005（平成17）年級群を主体とした漁況が散発的にまとまることもあったが、全体としては低水準で推移した。残存資源量評価から、4月以降も低水準で推移する海域が多い。なお、漁況経過から、

日向灘～土佐湾では、4月以降も前年を上回ると考えられ、海況によっては紀伊水道外域の漁況も好転する可能性がある。伊勢・三河湾では渥美外海・湾内でマシラスとして漁獲されているものが今後成長して漁獲されることが期待される。

房総以北海域においては、2006（平成18）年級群のカタクチイワシへの混獲率は低く、2007（平成19）年2月の調査（前出）からも、沖合での分布密度が前年（2005年級群）を下回っている可能性が高いことを考えると、今期の1歳魚は前年を下回ることが予測される。5月まではカタクチイワシへの混獲程度であり、漁獲がまとまるのは6月以降と考えられる。一方、2歳魚の2005（平成17）年級群は、現在も19cm以上の体長組成に出現しており、今後も漁獲対象になると考えられる。

漁獲される年級群の構成は漁況経過と体長組成から、相模湾以西では2006（平成18）年級群と2005（平成17）年級群が主体の後、2007（平成19）年級群が加わると考えられる。房総以北海域では2006（平成18）年級群と2005（平成17）年級群が主体になると考えられる。それぞれの体長は、2005（平成17）年級群が2歳魚として19～22cm、2006（平成18）年級群が1歳魚として15～18cm、2007（平成19）年級群は0歳魚として今期は13cm未満と推定される。

カタクチイワシ太平洋系群の漁況予報

今後の見通し（2007(平成19)年4月～7月）

対象海域：西薩～道東

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚(2007(平成19)年級群)、1歳魚(2006(平成18)年級群)、および2歳魚(2005(平成17)年級群)。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～鹿島灘のシラス(船曳網)

(1) 来遊量：西薩・志布志湾では好調だった前年並みか前年を下回る。豊後水道では不漁の前年並みか前年をやや上回る。土佐湾では前年並みか前年を上回る。渥美外海では前年を上回る。遠州灘～駿河湾では前年並みか前年をやや下回る。相模湾では前年をやや上回る。鹿島灘では前年を上回る。

(2) 漁期・漁場：全期間。

2. 北薩～紀伊水道外域(まき網、定置網)

(1) 来遊量：北薩・薩南では前年並みか前年を上回る。日向灘では前年を上回る。豊後水道、伊予灘では前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：全期間。

(3) 魚体：日向灘では10 cm以上(1歳魚)、他の海域では9 cm未満(0歳魚)主体。

3. 熊野灘～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

(1) 来遊量：熊野灘では前年を下回る。伊勢湾および渥美外海では前年を上回る。駿河湾～相模湾西部では前年並みか前年をやや下回る。相模湾東部では極めて高水準であった前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：伊勢湾、渥美外海では4月から。他の海域では全期間。

(3) 魚体：10～12cm(1歳魚)主体で12～13cm(2歳魚)が混じる。

4. 房総～道東(まき網、定置網)

(1) 来遊量：まき網は前年を下回る。三陸の定置網は前年並み。道東の定置網は前年を下回る。

(2) 漁期・漁場：まき網の主漁場は4月に常磐南部～外房海域で、5月以降常磐北部にも広がる。仙台湾から三陸南部の定置網は5月から。

(3) 魚体：9～11 cm台(1歳魚)主体。仙台湾から三陸南部の定置網は12～13 cm台(2歳魚)主体。

漁況の経過(2006(平成18)年12月～2007(平成19)年2月)および今後の見通しについての説明

1. 資源状態:

カタクチイワシ太平洋系群の資源量推定値は1998(平成10)年から2005(平成17)年まで80万～150万トンで推移している。水準は過去20年では高位、動向は5年間で横ばい傾向にある。本系群は漁場が形成される沿岸だけでなく黒潮親潮移行域から沖合まで広く分布している。

2005(平成17)年級は、2005年の房総沿岸のジャミセグロ漁況が好調であったこと、同年9～10月の道東まき網、同年9～10月の道東～三陸沖の中層トロール調査(東北水研)でも0歳魚時点で採集されていたことや、2006年4～6月の房総以北の漁況、同年9～10月の道東海域の漁況等から、近年の中では中水準であったと考えられる。

2006(平成18)年級群は、西薩・薩南海域を除く太平洋岸各地で春季にシラスとして前年を下回るものの平年並みで漁獲され、東海区においても未成魚・成魚として順調に漁獲された。しかし一方、常磐・房総沿岸では10～11月に0歳魚としての漁獲が少なく、道東海域では9～10月に0歳魚として漁獲されたが2005(平成17)年級群には及ばなかった。また2007年2月に常磐・三陸沖で行われた中層トロール調査(中央水研)では、調査時の海況の影響もあるがカタクチイワシの推定分布密度は2002年以降で最も低く、2006(平成18)年級群と思われる小型魚も少なかった。従って、近年の中では中～低水準で2005(平成17)年級群を下回ると考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体:

(1) 西薩～鹿島灘のシラス(船曳網)

西薩・志布志湾では2月現在でカタクチイワシ親魚の来遊水準が高く、周辺の漁況から今後とも来遊が継続すると考えられるため、近年(過去5年)を上回るが、豊漁であった前年並みまたは前年を下回る程度と予測される。佐伯湾(豊後水道)では、まき網の漁況等から親魚の資源水準が前年より低いと推定されるため、シラスの来遊水準は不漁であった前年並みか前年を上回る程度と考えられる。土佐湾では黒潮が足摺・室戸両岬沖を接岸基調で推移すると不漁となる傾向があるが、期間中は離岸傾向と予測されている。渥美外海では暖水波及により水温が高めで推移しており、産卵時期および来遊時期が早まっていると考えられ、既に3月にはカタクチシラスがマシラス混じりで漁獲されている。遠州灘～駿河湾では、前年の静浦港におけるカタクチイワシ水揚量と3～6月のシラス水揚量との間に見られる相関関係から、今漁期は前年並みから前年をやや下回り平年(過去10年)並みと予測される。相模湾では、春季のシラス漁獲量と相関がある大型成魚資源量指数(茨城水試)が前年をやや上回るが低水準であるため、不漁であった前年をやや上回るものの平年(過去10年)を下回ると予測される。鹿島灘では親魚が少ないと推定されるが、海況条件が良いため中漁程度で前年を上回ると予測される。

(2) 北薩～紀伊水道外域(まき網、定置網)

北薩および薩南では1月以降親魚の来遊水準が高く、周辺の漁況から今後とも来遊が継続すると考えられる。日向灘では房総～熊野灘の漁況と連動して2月から大羽の来遊があり、2004年以来の好漁である。過去に日向灘で春期に好漁となった年は4～7月も好漁であったため、今期は不漁であった前年を上回ると考えられる。豊後水道への1歳魚(2006年級群)の来遊水準は、近年では比較的高水準であった前年の1歳魚(2005年級群)を下回ると考えられ、また近隣の漁獲量が低水準であることから前年を下回ると考えられる。土佐湾から紀伊水道外域では成魚は主たる漁獲対象ではない。

(3) 熊野灘～相模湾(まき網、定置網、船曳網)

熊野灘では水温が平年並み～高めで推移すると予測されることから、カタクチイワシの来遊条件は悪く、低水温基調で比較的好漁であった前年を下回る。渥美外海でも水温が高めで推移しているが、来遊時期が早くなると考えられ、また伊勢湾内でも既にカタクチイワシの魚探反応が広く見られているため、伊勢湾～渥美外海では前年を上回る来遊があると予測される。駿河湾～相模湾西部は駿河湾における2006年12月以降の中型まき網の漁獲量が前年並みであったことから、来遊水準は前年並みか前年をやや下回る。相模湾東部では前年秋以降に定置網における未成魚の漁獲が少なかったことおよび大型成魚資源量指数(茨城水試)が低水準であることから、極めて高水準であった前年を下回る。

(4) 房総～道東(まき網、定置網)

12～2月の主漁場は、1そうまきで常磐南部～犬吠埼海域、2そうまきで鹿島灘～外房海域であった。体長12 cm以上(年明け2歳魚(2005年級群)主体)の来遊は12月上旬～1月前半までと例年より短く、後に続く体長12 cm未満(年明け1歳魚(2006年級群)主体)の漁況も低調である。今後の漁獲の主体は中～低水準と判断される1歳魚(2006年級群)であるため、予測期間中は9～11 cm台が漁獲の主体となり、前年を下回る漁となる。4月には12～13 cm台の群(2歳魚(2005年級群)主体)が九十九里～外房海域で一時的に漁獲されるが量は少ない。

三陸南部～仙台湾では2006年12月～2007年2月まで、まき網での漁獲量が前年を大幅に上回り、宮城県下の定置網での水揚量も前年同期の223%と好調であった。予測期間中は定置網では近年の漁況経過から5月が初漁と考えられ、2歳魚(2005年級群)主体で前年並みと考えられる。道東では1歳魚(2006年級群)主体で4～6月の間に沿岸の定置網および刺し網で混獲される可能性があり、前年を下回る漁獲になると予測される。